

唐詩 十首 書き下し文と現代語訳

○登鶴鶴楼

王之涣

・書き下し文

鶴鶴楼に登る

白日山に依りて尽き 黄河海に入りて流る
千里の目を窮めんと欲し 更に上る一層の楼

・現代語訳

(鶴鶴楼から眺めると)輝く夕陽が、しだいに(西の)山の稜線にもたれかかるようにして沈んでいき、

黄河は、(はるか東の)海に向かう勢いで(滔々と)流れていく。

(私は雄大な眺望に心を動かされ、遠く)千里先のかなたまで見はるかそうと、
更にもう一つ上の階へと上っていく。

○春曉

孟浩然

・書き下し文

春眠曉を覚えず 处处啼鳥を聞く

夜来風雨の声 花落つること知る多少ぞ

・現代語訳

春の夜の眠りは心地よいから、夜が明けたのに気がつかない。

(うとうとしていると)あちこちから鳥の鳴き声が聞こえる。

(そういえば眠りに落ちる前に)ゆうべはしきりに風と雨の音がしていたが、(その風と雨にたたかれて)

(庭に一面に咲いていた)花はどれくらい散っただろうか。

○江雪

柳宗元

・書き下し文

千山鳥飛絶え 万径人蹤滅す

孤舟蓑笠の翁 独り釣る寒江の雪

・現代語訳

全ての山々に鳥の飛ぶ影は絶え、

全ての小道から人の足跡が消えた。

みのかさを着けた老人が、一そこの小舟の中で、
ただ一人雪の降る冬の川に釣り糸を垂れている。

○望廬山瀑布

李白

・書き下し文

廬山の瀑布を望む

日は香炉を照らして紫煙生ず 遥かに看る瀑布の前川に挂かるを

国語総合教科書P360
～365ページ唐詩十首
の書き下し文と現代語訳
です！確認しましょう。

飛流直下三千尺 疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるか

・現代語訳

陽の光が香炉峰を照らすと、峰から紫色のもやが立ちのぼる。

(廬山の切りたった岩肌から)滝が前を流れる川に落ちかかっているのはるか遠くに見える。

(天空を)飛ぶ(かのような滝の)流れは、まっすぐに三千尺も(の高さを)下り落ちてくる。

(まるで)天の川が大空から落ちてきたかと思まがうほどだ。

○勸酒 于武陵

・書き下し文

酒を勧む

君に勧む金屈危

満酌辞するを須みざれ

花発きて風雨多く

人生別離足る

・現代語訳

君にすすめよう(この)黄金の大杯を

なみなみとついだ(この)酒を辞退などしないでくれ。

花が開くと、風や雨が多く

人生には、別離ばかりが満ち満ちているのだ。

○送元二使安西 王維

・書き下し文

元二の安西に使ひするを送る

渭城の朝雨輕塵を浥し 客舎青青柳色新たなり

君に勧む更に尽くせ一杯の酒 西のかた陽関を出づれば故人無からん

・現代語訳

今、ここ渭城の町で君を見送ろうとするが、朝方の雨が舞い上がりやすい砂ぼこりをしっとりと湿らせてくれた。

(二人が泊まった)旅館のあたりの柳が、雨に洗われて青々と鮮やかな色を見せている。さあ君、どうです、もう一杯飲み干していきなさい。

これから西へ旅立ち、国境の町陽関を越えてしまったなら、こうして酒を酌み交わす親しい友人もいないのだから。

○黄鶴楼送孟浩然之広陵

李白

・書き下し文

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

故人西のかた黄鶴楼を辞し 煙花三月揚州に下る

孤帆の遠影碧空に尽き 唯だ見る長江の天際に流るる見る

・現代語訳

私の友は、ここ西方の地で黄鶴樓に別れを告げ、
花咲きかすみ立つ春の三月、揚州へと下って行った。

(友が乗っている)一そうの帆掛け舟の遠ざかっていく姿は、やがて青空の中に消えて行き、
(あとには)ただ、長江が大空の果てへと流れるのが見えるばかり。

涼州詞

王翰

・書き下し文

葡萄酒の美酒夜光の杯

飲まんと欲して琵琶馬上に催す

酔ひて沙場に臥す君笑ふこと莫かれ

古来征戦幾人か回る

・現代語訳

葡萄酒のうまい酒がなみなみと満たされたガラスの杯、

(いまでも)飲もうとすると、(突然)馬上で(早く飲み干せと)酒興をそそるかのように、琵琶がかき鳴らされる。

(もし)酔いつぶれて(戦場である)砂漠に寝そべってしまったても、君よ、(そのだらしない姿を)笑わないでくれ、

昔から、こうして遠く戦争に駆り出された兵士のうち、(いったい)何人が無事に故郷の土を踏めたことか(ほとんどの兵士が帰ることなく死んでしまったのだから)。

春望

杜甫

・書き下し文

国破れて山河在り 城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を濺ぎ 別れを恨みては鳥にも心を驚かす

烽火三月に連なり 家書万金に抵たる

白頭・けば更に短く 渾て簪に勝へざらんと欲す

・現代語訳

国都の長安は(戦乱のために)破壊されたが、(自然の象徴である)山と川だけは以前と変わらずに存在しており、

長安のまちには春がめぐってきて、草と木が(昨年までの春と同じように)深々と生い茂っている。

(混乱の続く)時世に深く心を動かされて、(目を楽しませるはずの)咲く花(のいろどり)を見てもはらはらと涙をこぼし、

家族との別れをいたみ悲しんで、(耳を快くさせるはずの)鳴く鳥(のさえずり)を聞いてもびくつとする。

(いくさを告げる)のろしは、晩春の三月になってもやまずに続いている。

(交通の途絶してしまった状況では)家族からの手紙は、(もし万が一、届いたならば)万金にも相当するものに思われるだろう。

(心痛のために増えた)白髪(の頭を搔きむしると、ますます(抜け落ちて)薄く乏しくなり、(もはや)全く(役人がかぶる冠を留める)かんざしを挿せなくなりそう)なほどだ。

○香炉峰下、新卜山居草堂初成、偶題東壁

白居易

・書き下し文

日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し

小閣に衾を重ねて寒を怕れず

遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き

香炉峰の雪は簾を撥げて看る

匡廬は便ち是れ名を逃るるの地

司馬は仍ほ老を送るの官たり

心泰く身寧きは是れ帰する処

故郷何ぞ独り長安のみに在らんや

・現代語訳

日は高くなるばかり、睡眠も十分とったが、まだ起きるのはめんどうだ。

この草堂で掛け布団を何枚も重ねているから、寒さの心配もない。

遺愛寺の鐘の音は、(寝たまま)枕を傾けて高くして聴き、

香炉峰に白く積もる雪は、手を伸ばしてすだれをおしあげてながめる。

ここ、廬山こそは、世俗の名利を避けて暮らすのに適した土地であり、

司馬という仕事もやはり余生を送るのに適した閑職である。

身も心も平穏でいられる場所こそ、人間の安住の地。

故郷はどうして、ただ長安にだけあるのだろうか。(いや、長安にだけあるのではない。)